

平成23年度 第4回芦屋市立中学校の昼食の在り方を考える懇話会 会議録

日時 平成24年2月15日(水) 10:00~12:00

場所 芦屋市役所北館4階 教育委員会室

出席者

委員長 河合 優年
副委員長 増澤 康男
委員 笠原 清次
長谷川 則光
平岡 栄
氏原 佳代子
中塚 巳津子
堂脇 里真
入江 祝栄
片岡 登志子

教育委員会事務局

波多野 正和
丹下 秀夫
北野 章
西尾 節子
俵原 正仁
長谷川 真弓

会議の公表 公開

傍聴者数 12人

1 議 事

- (1) 記述回答等, 資料に沿った趣旨説明
- (2) 芦屋市立中学校の子ども達にとって, 望ましい昼食の在り方について

2 内 容

＝開 会＝

管理部長 挨拶

本日は, ご多忙の中, 中学校の昼食の在り方を考える懇話会にお集まりくださり, ありがとうございます。前回から懇話会としての意見の整理を始めていただいているわけですが, 本日も, 中学校での望ましい昼食のあり方について, 忌憚のないご意見をお願いいたします。

＝議 事＝

- (1) 事務局より, 資料の確認の後, 記述回答等資料に沿った趣旨説明をおこなう
資料1 第3回議事録要旨

資料2 保護者アンケート等（記述回答のまとめ）

資料3 芦屋市立中学校の昼食の在り方を考える懇話会報告書（委員長案）

河合委員長：今回は、昼食の問題について、子どもの育ち・学びということを意識した上で、芦屋の子ども達の未来にこんないことがおきるであろうという面や、時程の問題とか教育の中で昼の時間、昼食の時間をどうとるかというところなどをお話いただきたいと考えています。まずは、事務局から、前回、増澤副委員長から依頼のあったことについて、ご説明いただけますでしょうか。

事務局/北野：前回の懇話会で、記述回答をまとめるように宿題をいただきました。

No. 1, No. 2 は、保護者アンケートの結果です。まず、No. 1 をご覧ください。「あなたは保護者が家庭で作った弁当を子どもに持たせることが、中学生の心身の健やかな成長に影響していると思いますか。」という問の保護者アンケート総回答数は503でした。それを大きく4つ、その他1つに分けて整理しました。一番多かったのは、4の「家庭の弁当は、子どもが愛情・ぬくもりを感じることができる」で、その次は、2の「子どもとのコミュニケーションが図れる」でした。それを実感している保護者がたくさんいるということです。

No. 2 の「あなたは中学校で給食を実施することが、中学生の心身の健やかな成長に影響していると思いますか。」に対して、そう思うと答えた数は、527でした。これを7種類とその他の計8つに分類しました。一番多かったのは、1の「栄養バランスのよい食事をとることができる」で、これで半数強を占めています。それ以外で特徴的なものは、2の「家庭から弁当を持ってこられない子どもも、栄養のあるものを食べることができる」です。精神的な負担の軽減やバランスのよい食事をとることができるというメリットが、給食を導入することによってあるというご意見も多かったです。「給食によって、好き嫌いを直すきっかけになる」という意見は5.1%あるのですが、この意見に対しては、その他の項で、それに反する意見も出ています。

No. 3, No. 4 は、市民アンケートの結果です。あなたは保護者が家庭で作った弁当を子どもに持たせることが、中学生の心身の健やかな成長に影響していると思いますか。」という問には、236の回答数がありました。傾向は、保護者アンケートと似ています。4の「家庭の弁当は、子どもが愛情・ぬくもりを感じることができる」が64%で、これは保護者アンケートよりも多い値です。

No. 4 の「あなたは中学校で給食を実施することが、中学生の心身の健やかな成長に影響していると思いますか。」の回答数は200です。これも、保護者アンケートと同じ傾向で、一番は「バランス」、次に、「個人差がない。平等、協調性」となっています。

No. 5, No. 6 は、教職員アンケートの結果です。No. 5 の回答数は、78でした。教職員アンケートも傾向は保護者アンケート・市民アンケートと似ています。ただ、1の「伸び盛りの中学生にとって、家庭弁当は子どもの好みや食べる量の違いに対応した食事が用意できる」の割合が他のアンケートよりも少し多いようです。先生方は、子どもたちと直にすごしているだけあって、アレルギー対応などに対して意識が高くなっているのでしょうか。

No.6の「あなたは中学校で給食を実施することが、中学生の心身の健やかな成長に影響していると思いますか。」は、回答数が30です。1番多いのは「栄養バランス」で、次は「家庭から弁当を持ってこれられない子どもも、栄養のあるものを食べるができる」と、ここでも他と同じ傾向を見ることができます。

また、センター方式で実施した場合の経費の試算についてですが、こちらについては、精査された値でないことを前提として話させてください。

三つの中学校の生徒の総数約1500名をカバーできるセンターを作らないといけません。それぞれの学校に配膳室も必要です。ただ、配膳室を作るといっても、山手中学校などは、どこに配膳室を作るのかという用地の問題もあります。一つの駐車場をつぶしたり、配膳室を2箇所に分けて設置したりするなど、検討事項は残っています。この他にも、備品、消耗品などにかかる費用もあります。これらのことを、全て考えると、初期投資として10億円程度かかると考えられます。

センターを建てるためには、3000㎡ほど必要なのですが、これぐらいの大きさになると、工業用地になります。ところが、芦屋市内には工業用地がありません。芦屋市の地価の平均なら出せないこともないのですが、あまり意味がないように思えますので、土地代の算出については、難しいです。

ランニングコストとしては、調理員の数が自校方式に比べると少なくなりますので、半額程度で済みます。

以上のことから、センター方式の場合、これだけ必要であるというはっきりした経費の試算を想定することは難しい・・・ということをお報告させていただきます。

増澤副委員長：自由記述の報告では、目立つ意見を吸い上げて、あたかも全体の意見かのように取り上げることもあるのですが、このようにまとめていただけると、そのようなことを防ぐことができますね。全体の傾向が分かるようにまとまっています。すっきりとつかめますし、説得力も出てきます。気をつけなければいけないのは、この分類は、あとから意図的に分けていますので、書いた人の思いと細かいニュアンスが違っているという可能性はあります。ただ、中身を見てみますと、懇話会での議論の方向と同じようで、中身も似ていますので、方向性はいいのかなと思います。

(2) 芦屋市立中学校の子ども達にとって、望ましい昼食の在り方について

河合委員長：懇話会で出た資料はできるだけ、報告書に載せて示していきたいと思っています。私たちはこう見たけれど、それはどうなのか。次の人が見て、しっかりと判断が出来るようにしたいからです。

前回の懇話会では、「導入をした際のプラスの側面、マイナスの側面」について話していただきました。「マイナスの側面」という言葉だけをとらえたら、イメージ的に「給食はよくない」といった感じになりますが、決してそういうことではありません。ただ、誤解されてもいけませんので、これからはマイナスという言葉ではなく、留意していかなければいけないこと、問題があるということをはっきりさせるというとらえ方でいきましょう。「こういうところを注意してほしい。」「ここをしっかりとしてほしい。」ということと共に、それが後に大きな負担とならないように、経費の問題も留意点として、はっきり示していきましょう。

今まで芦屋市に工業地区がないということは、それを誇りと感じている人もいるだろうし、作られないことを前提として、そこに住んでいる人もいるはずです。センターを建てることによって、特定の地域に負担をかけることがあってはいけません。このようなことも含めて、経費としては、特定できないと報告書に載せていきます。

方式にしても、いろいろな方式がありますが、どの方法がいいかは懇話会では十分議論できていません。三木市の場合、給食が実施されるまで、会を何回も何回も行っていきます。どの方法がいいとか軍配をあげるのではなく、どこどこで見てきた方式はこうであったという事実を、報告書に淡々と書くこととなります。この報告書は、次回に見ていただくつもりです。

氏原委員：芦屋PTA協議会でも、いろいろな意見が出ています。専門委員会では、「校舎の建て替え」や「授業・部活の人材確保」をお願いしたいという声も多いです。「中学校給食」だけでなく、今の子どもたちの中学校生活で大切にしていけるものは何かを、時間をかけてじっくりと検討してほしいです。とりあえず何が何でもやるというのではなく、給食実施については、他の事業も含めた中で優先事項をつけてほしいです。懇話会の後に、調査検討委員会ができると思うのですが、三木市の場合、構成メンバーは、学校長、栄養士、教育委員、PTA代表だったそうです。芦屋市でも、保護者の意見が少しでも届くように、次の委員会には、PTAの代表を入れてほしいと思います。

「皆が平等である」「同じものを同じ状態で食べる」ということは、とても大切なことです。1度始めると後戻りできないので、とりあえず始めるのではなく、時間をかけて検討したらいいと思います。急いであることはありません。一つでも二つでも、課題をクリアしてから始めてほしいです。

笠原委員：導入するならていねいに進めてほしいという意見に賛成ですが、この懇話会は、今の中学校教育の優先事項について話す場ではないと思います。アンケートの「あなたは中学校で給食を実施することが、中学生の心身の健やかな成長に影響していると思いますか。」という問いに対して、栄養のバランスのことについての割合が多いのですが、これが大切だということは小学生でも分かることです。アンケートを見て思ったのは、「食育」のことについて触れている保護者の人数が非常に少ないことです。教職員のアンケートでも、2名しかありません。これが課題だと思います。

小学校給食の質を中学校で落とさないことは大前提で、中学生がおいしさを感じて食べることでできる給食にしないとはいけません。芦屋の給食の質の高さは、これまでの実績と栄養士の研修が支えています。他の市と違い、一つひとつの食材の吟味と見極め、季節感等をきちんと検討・研究しています。味付けも偏らないように、同じ味を続けて出すことはまずありません。ただ、小学生は、そこまで理解できませんし、まだまだ受身で給食を食べさせてもらう気持ちが強い傾向があります。「おいしさ」を軸として、給食を食べることを、中学生なら栄養士と食育の授業との連携で主体的に取り組むことができるのではないのでしょうか。「おいしさ」を成立させているものは何か、自ら理解を深めていくことが期待できます。前述の食育に対する意識を変えていくことです。中学校での給食の意義が出てきます。

河合委員長：優先順位は、ここで決められないし、ここでは話せません。「優先順位も含めて、充分議論してください。」と提案するぐらいでしょうか。やはり、給食を実施す

るとなると、時程の問題が出てきます。教育の一環として、給食準備の時間、子ども達はどう過ごすのか、お昼の時間はどうかなど考えていかないといけません。

長谷川委員：他市の例から考えても、教師と生徒のふれあいの時間が短くなることは間違いないでしょうね。アンケートでは、給食を望む声が70%を超えていますが、これは、質の高い給食がおこなわれることを前提としているものだと思います。今、小学校で行われている芦屋の給食が、そう思わせるのでしょうか。どんな給食でもいいというわけではないと思いますので、やはりじっくりと検討していくことが必要です。

また、中学生の保護者からは、お弁当を支持しているという声をよく聞きます。幼稚園、小学校の保護者とは、また違った考えを持っているようです。中学校では、お弁当を持ってきていない子のために、パン・弁当の販売を始めました。当初、この数は増えていくのかと思っていましたが、実際は、思いに反して、数は増えていません。保護者の方も、弁当に意義を見出して、弁当作りをがんばってくれているようです。

後、私自身は、「同じものを食べさせる」ということが、必ずしもよいとは思っていません。中学生の発達期のことを考えると、それぞれの個性があっというし、それぞれにあわせた食育があっというと思うからです。どの方式がいいとかは言えませんが、給食云々よりも、選べる方式という考え方があってもいいのではないかと思います。保護者が選べるような形です。

増澤副委員長：「個の尊重」「平等」「全体の問題」という話題が出ていますが、欧米から見れば、中学生が同じものを食べること自体、奇妙なものかもしれませんね。個人の自立を・・・ということでは、私も長谷川校長先生の思いと同じです。

ただ、現状では、給食を使ってクラスをまとめるということを小学校ではやっていますので、このことが、中学校でもできるのかということが、議論の対象になってくると思います。昼休みがなくなってしまうことについては、やり方次第で変えられるかもしれません。給食にしたら、何もなくなってしまうということではありません。小学校で、できるのであれば、中学校でも可能だと思います。教育上必要なことなら、初めから「昼休みをとるんだ」「生徒指導の時間をとるんだ」とした上で、話を進めていくといいのではないのでしょうか。「個の問題」「全体の問題」は、すべての教育に係ることですので、どこか頭の隅においておけばいいと思います。

河合委員長：時程の違いもあるので、小学校と中学校では同じようにいかないこともあるでしょうね。できること、できないことは慎重に議論していかないといけません。芦屋市の各学校における時程については、資料を準備して、報告書の中にも入れていきましょう。

平岡委員：自分は中学生の時、給食でした。学校の周りはみんなお米を作っているのに、給食ではお米を食べずにパンを食べる。当時は、普通に受け止めていました。芦屋市の子ども達も、給食を与えられ続ければ、そのことを当たり前と受け止めると思います。ただ、導入時は、混乱期があるはずで。

「中身を充実したものに。」という市民の声は大事です。「栄養バランス」についての意見が多いということは、家庭での食のバランスに自信がないということではないのでしょうか。自分たちで整えるのは難しいから、給食がいいという意見です。食として大切なものを、芦屋市は崩さないでほしいです。実際、子どもの嗜好にあわせて菓子パ

ン給食のような給食をしている県や市もあると聞いています。そういうのは違う気がします。質の高い給食を維持するために、人がいるのなら、人を入れてほしいです。

片岡委員：笠原校長先生が言われていた「小学生は受動性が強い、与えられる存在。中学生は、主体的、能動的に動けるはずだ。」というご意見について、私も本当にそうだと思います。朝日ヶ丘小学校で、栄養士の先生の話をした時、栄養士の先生が誇りを持って働いているのが分かりました。栄養士さんと食育の先生とが連携して、本当においしいものを提供できるように、地産地消だとかも気をつけたり、校内放送でメニューの紹介を行い、毎日食べているものを知らせたりするなど、いろいろな工夫をされていました。「中学生もこのようなバランスのいい給食を。」と願っている市民も保護者も多いはず。「バランス」「おいしさ」「あたたかさ」など、栄養士や食育の先生が吟味されてやってこられたことですから、やはり給食はベストだと思うんです。

先生方も不安はあると思いますが、給食の時間の使い方については、西宮なんかは、当番の子だけが準備をして、他の子は、図書室や廊下で過ごしているそうです。昼休みがないという感じはなかったです。先生が中心になって準備や片づけをするのではなくて、生徒たちが主体的にやっているのを見ていて、私は、あまり不安は感じません。加古川でやっている先生方も、あんまり苦にならないと言っていました。そんなに時間がなくなるわけじゃないみたいです。実施するに当たっては、どんな方式でも、問題は出てくるでしょう。現場の調理師さんも入れて、PTA 代表も入れて、検討していく方向を懇話会の報告書に入れてほしいと思います。

入江委員：給食を実施する方式にはいくつかあるのですが、民間委託のデリバリー方式を考えるとしたら、「安全な食品」「栄養バランス」等、芦屋市が大切にしているものに同意してくれる業者さんにしてほしいです。ぜひ、探してください。市の栄養士さんを派遣できて、希望する給食に近づけてくれるようなところがあれば一番いいのですが。このことは、今の中学生に出している仕出し弁当でも同じことが言えます。安全とバランスを考えてくれる業者さんを探してほしいと思っています。

事務局/北野：デリバリーに関しては、自分のところで作った弁当を配送してくれる業者はあります。その場合は、注文数が多くても少なくてもしてくれます。ただ、芦屋の近隣で、1500食専用の物をつくってくれるところは見つけていません。広域で検討しないとイケません。姫路あたりで一部できているところがあると聞いているのですが。

笠原委員：配送から納品まで、「子ども達が給食をおいしく食べることができる」ということを考え続けてくれる業者を探してほしいですね。芦屋のよさを生かしてくれるような。

入江委員：そういうのをめんどくがらずに、対応してくれる業者さんをぜひ見つけてほしいです。学校とのやり取りを嫌がらない業者、デリバリーでも食育のできるようなものを提供してくれる業者がいいですね。

堂脇委員：3人の子供が、公立中学校を卒業しているのですが、私は、子どもを通じて、学校のことを知ることが多かったです。弁当を持参させている保護者からは、あまり給食を望んでいないという声も聞きます。「栄養のバランス」は、大事なことだと思いますが、はたして、そのことが学校の一食でまかなえるのかどうか疑問に感じてい

ます。ただ、3日続けて、ファストフードという家庭があるのも事実で、そのような現実を見ていると給食を実施するメリットもあると思うのですが。

実際の中学校の場で、給食を希望する声が少ないのは、学校の様子を見ているからだと思います。中には、手のかかるお子さんもいます。どうしても、先生の意識はその子に集中してしまい、他の子に目が向けにくくなります。優先順位はいけないといっても、これ以上、先生と子どものコミュニケーションの時間が減ると、ますますこの傾向は強くなるのではないのでしょうか。先生は多くの子どもたちと触れ合う時間がほしいと思っているはずで、先生の負担にならないものはないのかということを経験を掛けて検討してほしいです。高校の校区変更など、新しいことが導入されていく中で、さらに給食実施が重なればどうなるのか。子どもが落ち着いて、生活することができなくなるのではないかと、危惧します。

7割賛成している市民の中には、なんかの負担があるのなら、いやだという方もいるはずで、慎重に考えていく必要があると思います。そういうことも検討してほしいです。

笠原委員：報告書の中に、「調査結果を受けて」という項があります。「中学生の保護者」のアンケートの数字75%を解釈の仕方を変えてはいけないと思います。我々懇話会のメンバーが、この調査結果をどう理解しているかをはっきりさせないといけません。「家庭の弁当は、愛情を感じることができる。」が50%を超えているのですが、これが給食になってから、子どもたちが親の愛情を感じてしまうのかどうかを検討しないとダメです。全くそうと考えるのか、そうでもないとするのか、その辺の整理がいるでしょうね。

河合委員長：このデータをどう読むのかということですが、このことについては、「解釈はしない」「事実を事実として出す」というスタンスになるでしょう。読み取ろうとすれば、またそのための調査をしなければいけなくなってきます。

増澤副委員長：アンケートを見てみると、中学校給食に賛成の保護者が多いということは、確かです。大前提として崩せません。ただ、実際には、賛成ではないという声も聞こえてくるのも事実なのでしょう。愛情弁当に対しては、給食をすることで「どう代わっていくのか。」そういうことを考えていかなければいけません。まとめておくと、後の議論に役立つと思います。

河合委員長：アンケートの数字の読み方については、慎重に考えていく必要があります。ここで出したものが一人歩きすることのないように、透明なものを出していきましょう。「お弁当の愛情」を給食にするとどうなるか。これだけで、一つのチームを作らなければならないぐらい大きなテーマです。

片岡委員：芦屋市の小学校の給食を見てみると、あたたかさや栄養のバランスなど多くの素晴らしい点が上げられます。朝のあわただしい忙しさの中で作ったお弁当が、小学校の給食のレベルまで、できているのでしょうか。愛情弁当の「愛情」という言葉が一人歩きしているような気がします。昼に愛情が注げなくても、その分、朝や夕に愛情を注げばいいと思っています。もちろん、愛情弁当は、印象には残るし、努力もしている保護者の方も多いのですが、食育は何も愛情弁当だけのことではないですよ。この間、小三の孫が、みそやしょうゆのことについて調べていました。食育は

いろいろなところで行われています。中学生になると、輸入や自給率など、もっと深いことまで考えていけるのではないのでしょうか。ただ、デリバリー方式だと、お弁当のような形でくるので、デリバリー方式についての検討は必要だと思います。

入江委員：愛情弁当に「愛情」を注いでいるという家庭があるということも事実なので、単に愛情弁当を否定するということとはできないと思います。事実、私は、愛情を注いでつくっているし、子どももそのことは感じてくれているようです。個人的に考えると、自校方式にもいい点があるのがわかるし、選択方式もありかなと思います。それを次回に検討してほしいです。「愛情弁当」も無視はできないと思います。

河合委員長：今回のことは、従来からの枠にとらわれず、芦屋の方式は何だということをもう一度考えるいいチャンスです。選択方式も検討事項の中に入れていけばいいと思います。「このデータについては、こういうことだから、これを解決して、進んでいけばいい。」というような議論になるように。

堂脇委員：アンケートでは、給食を実施してほしいという高い数字が出ていますが、親だけではなくて、お弁当がいいという子どもの声もあります。そういうことも含めた上で考えていけばいいと思います。食の安全についてですが、アレルギーの問題も含めると、家からお弁当を持っていくほうが給食より安全ではないのでしょうか。

中塚委員：学校に行くと、子どもの様子や教師の様子など、いろいろな様子を見ることができます。保護者の立場から言わせてもらえば、そこで一番感じることは、小学校と違い、時間がないということです。お弁当の今でも昼の時間はあまりありません。小学校と違い、どんどん後ろ倒しになっていきます。部活をする時間も減って、クレームがくるのではないのでしょうか。もちろん、「慣れてしまえば・・・。」と言われれば、その通りなのですが。

幹事会の中で、「市民の賛成は70%なのに、なぜ先生方の賛成は少ないのか」と聞かれましたので、「先生が反対しているのは、めんどくさいとか言うのでは決してない。」と答えました。今でも、やらなければいけないカリキュラムの中で先生方が精一杯やっている姿を見ていますので。校区が広がったり、指導要領も変わったりしていく中で、こういうことを、まったく無視して、どのように給食を導入するのかということだけ考えたらいいということはないと思います。敷地の問題、未納入の問題、デリバリーで欠席の時どうするのかという問題など、考えていかなければいけないことがたくさんあります。「芦屋の給食は、おいしかった。」で終われるように中学校の3年間も充実したものにすることが前提です。小学校の6年間はよかったけれど、中学校の3年間はだめではいけないと思います。

また、家庭科の調理実習は、大切な食育の一つです。お弁当、給食、家庭科、どれも食育につながっています。他の市は、そこまで力を入れて家庭科をやっているのでしょうか。精中では、家庭科にも力を入れていただき、調理実習は食育であるという考えで能動的にやってくれています。

河合委員長：今日、話題になっている一つ一つのことを議論していこうと思えば、何十回も会を開かないといけません。月に2回やったとしても、年間ほど続ける必要はあります。だから、どこの比率が大きい小さいかではなくて、一つ一つの項目をしっかりと議論していかなければならないでしょう。比率が大きいから、この意見はいい

ということは、懇話会では出していきません。これがいいというのではなくて、これがスタートなんだということです。

長谷川委員：給食を最近導入した市の先生方から、やはり、給食実施に伴って、時程の問題、偏食の問題、給食委員などの人の問題など、課題がたくさん出てきているという話を聞きます。もちろん、給食を実施することによるメリットもたくさんあることはわかっているのですが、学校経営の立場として言わせてもらおうと、このような課題を一つでも克服した上で始めてほしいと思います。実施されれば、いずれ当たり前の風景になっていくのですが、課題を残したまま「とにかく給食をするんだ。」というように、勢いにまかせて、導入するのだけはやめてほしい。

河合委員長：文章として残すというのが、懇話会の役割だと思っています。それぞれのお考えを一つ一つ検証して議論すると、何十回もかかります。こういう課題があるということをつかんだ上で、検討を始めてくださいということになります。次回の会までに、懇話会としての報告書を文章の形にまとめて、あらかじめ委員の方に送らせてもらいます。まずは、あくまでも委員長案ということで原案を出していきますが、最終的には、懇話会案として出すことになります。こういう項目も付け加えたほうがいいということがありましたら、事務局のほうに言っていただければ、整理していきます。

増澤副委員長：小学校給食のレベルを下げたまで、中学校給食をおこなうのでは意味がありません。そうなれば、前提が崩れるということになります。何でもいから給食を導入すればいいということではないことは、強くお願いしたい。

(5) 今後の日程について

事務局/北野：第5回は、3月22日の10時から予定しています。この部屋で最終回を持ちたいと考えています。

＝閉 会＝

学校教育部長 挨拶

今日は、委員長から報告書の骨子を提案していただきました。引き続き、ご苦労をおかけしますが、よろしく申し上げます。本日は、長時間のご審議ありがとうございました。